

派遣研究員

氏名	王子成 (WANG Zicheng)
所属	外国語学研究科 中国言語文化専攻 博士後期課程
派遣期間	2015年12月1日～2015年12月17日
派遣先	華東師範大学 中国非物質文化遺産研究中心
研究課題	江浙地域媽祖信仰の変容と受容について



媽祖信仰の受容と変容から見る文学への影響

——上海、杭州、衢州を中心として

王子成

一、研究趣旨

媽祖は中国の沿海地域で、特に福建省を中心に信仰を集める道教の女神である。媽祖信仰は海上貿易が盛んになるにつれて、福建商人による貿易活動を通じ、中国の津々浦々にまで広がっていた。交通と貿易を守る水神として知られ、次第に万物に利益がある神と考えられるようになった。さらには、歴代の皇帝に信奉され、媽祖を祀る行事は国家の公式な行事として発展していった。

従って、媽祖信仰は単なる民俗信仰ではなく、地域文化のアイデンティティ、伝統文化の継承などに対して重要な意味を持っている。例えば、宋の時代以降の知識人が書いた筆記や小説の中には、媽祖信仰から敷衍した物語が見られる。そのことから、古典文学の創作に媽祖信仰から影響を受けたことが明らかである。

中国の古典文学研究を専門とする筆者が、人類学の視点を中国の研究に取り入れれば、古典小説を新たな角度から楽しむことができると思う。

また、媽祖信仰のような民俗信仰を調査することで、文学と民間風習の繋がりを探りたい。具体的にいえば、媽祖信仰は古典小説に頻繁に見られる江南地域の水神物語、稲作文化とどのような関係があるのかを探り、文学作品における媽祖像の形成過程を明らかにするため、江浙地域の媽祖信仰についての調査に赴いた。

二、上海の媽祖信仰について

『上海資料研究』に収録される「天妃宮略考」によると¹⁾、上海にかつて存在した天妃宮には聖妃宮（順濟廟と

もいう）、南聖妃宮と天妃宮の三社があった。そのうちの、聖妃宮は、最も早い時代に建立され、現在もなお上海に残る唯一の媽祖廟である。

聖妃宮の場所については、明の正徳『松江府志』には「南聖妃宮、在市舶司之左」、嘉靖『上海県誌』には「南聖妃宮、在順濟廟南、順濟廟又名聖妃宮、人呼此為南聖妃宮」、『上海道教碑刻資料集』に収録される元の至元二十七年、宋渤による「上海順濟廟記碑²⁾」には「莆有神、故号順濟、松江郡之上海為祠、岁久且圯、宋咸淳中、三山陈珩提举华亭市舶、议徙新之……」と書かれてある。このことから、上海に建立した最初の媽祖廟は遅くとも宋の咸淳年間までに遡ることができる。

また、「天妃宮略考」によれば、宋の徽宗が媽祖に「順濟夫人」の号を賜ったのは宣和五年（1123年）、上海の順濟廟が長い年月を経て、壊れた後再建に至るのは咸淳七年（1271年）であり。以上のことから見て、上海媽祖信仰の伝来は早かったことが分かった。

この廟は最初、上海の小東門十六舖に位置していたが、歴代の戦火で焼かれては再建されるを繰り返し、今見られる建築は清代のもので、無形文化財として保護するために、松江の方塔園の中に移った。すなわち今の「浦江媽祖」である。

小東門十六舖地域は、宋の時代から漁民の集落があり、貿易が栄えるにつれて、清代になると埠頭に軒を並べるようになった。福建の郷土文化と深く結び付いている、上海における媽祖信仰の伝播は、福建商人たちによる海上貿易の展開と深い関係がある。それに加え、中国



南部からの移住者が多いこともあって、上海の媽祖信仰はきわめて盛んであった。

ところで、上海における媽祖信仰の伝播は、地元の水神信仰とどういった繋がりがあるのか、上海市内の郷土神廟、水神廟を探った。

上海豫園にある城隍廟の中には、上海の郷土神である城隍神の他に、道教の神々も祀られている。興味深いことは、廟の管理者である道士たちが道教の慈航真人に媽祖を習合し、祭祀することである。また、市内昆明路73号提籃橋地区にある下海廟を訪ねた。かつての提籃橋地区は海の入江になっており、水運と交通の要衝であった。そこに水神廟が建てられ、航海の守護神たちが祭祀されていた。今の下海廟は仏廟に変わったが、仏教の神々と共に媽祖が分霊祭祀されている。

三、杭州の媽祖信仰について

つづいて、杭州の媽祖信仰及び水神信仰について調査を行った。

まずは文献資料から見てみる。南宋時代の呉自牧が書いた『夢梁録』巻十「順濟聖妃廟」に、「順濟天妃廟，在艮山門外，又行祠在城南蕭公橋侯潮門外瓶场河下市舶司側。……其妃之灵多于海洋之中，佑护创比，其功甚大，民治疾苦，悉赖帡幪。」と書いてある。すなわち、媽祖信仰が遅くとも南宋時代までに杭州に伝わったということである。

清代の雍正『浙江通志』巻二百十七の「祠祀一・杭州府上」の錢塘県、仁和県条に、杭州の媽祖廟についての記述があった³⁾。

また、嘉靖帝時代の『使琉球記』には、「后行经杭州，登吴山，致祭越国公祖庙，庙之左有天妃宫，天妃为海道正神。……越日，过孩儿巷天妃宫，无意中得《天妃经》一函于案上，其后详书历朝封号，则“碧霞元君”者，崇祯十三年加封天妃之号也，神之灵显如是。」と書いてある。

文献資料の記録に基づいて、呉山、武林門、孩児巷及び周辺地域で調査をした。残念なことに、年数が経過し、残っていない。だが、呉山で昔盛んだった媽祖信仰は今では観音信仰に形を変えている。その理由は、今の時代では海上貿易におけるリスクが減ったと推測され、媽祖が必要とされなくなり、その代替として観音信仰が盛んになったと考えられよう。

興味深いことに、媽祖信仰の伝播に観音信仰との習合が見られる。媽祖が女神だとする伝説は若干、旧来の古典小説の中に描かれる観音の靈異故事に似ている。それ故に、呉山の観音信仰は媽祖信仰の変容と考えられる。



●図1 方塔園媽祖廟の廟記（石碑文）



●図2 方塔園媽祖廟（上海天妃宮）



●図3 杭州の武林門跡地





● 図4 呉山の観音信仰



● 図5 杭州孩児巷

四、衢州の媽祖信仰について

まずは地名から見てみたい。衢州はかつて、交通の要衝として発達し、貿易が盛んであった。四通八達しているため、「四省通衢」の美名がある。衢州の「衢」はまさに交通の便利さを忠実に反映している。

衢州の南は福建の南平と隣接し、水路を通して、隋の煬帝の時に開削された大運河と繋がっている。そして、媽祖信仰は福建から出発して衢州を通り、上海と杭州に広がったと考えられる。衢州は文学における媽祖文化の変容に関しても重要な場所であり、媽祖信仰の伝播に大きな役割を担っていたと想像しながら、調査を行った。

鄭永禧が編纂した民国版の『衢県志』に、「原有老天后宮又称天妃宮，在县治西朝京门之南，为明代军卫漕船吏卒所建。说明这座建筑最初是漕运船只上的军士们所建。清嘉庆年间，由旅衢的福建商人出资重建，同时作为福建商人的福建会馆。」と記録されている。文献資料から分かるように、衢州の媽祖信仰の伝播は漕運や貿易と繋がっている。建立時代は明代であるが、宋の咸淳年間、上海に既に媽祖廟が作られていたことから考えると、衢州媽祖廟の建立はそれ以前にあったと考えられる。

また、この明代の媽祖廟が福建会馆として再建されるのは、清代の嘉慶年間になってからのことである。媽祖廟の廟址は、『衢州府志』の「坊市」条の記録によると、市内の天王巷にあるとのことなので、実際に訪問し、天皇巷に位置していることを確認した。衢州方言では「王」と「皇」の発音は区別しないため、時代が変わるのに従って、地名が誤って天皇巷と呼ばれるようになった。

天皇巷天妃宮の建築は上海天妃宮（一般仏寺や道観の構造）と異なって、外観は箱型に見え、西向きの正門に入ると内部は困楼⁴⁾の様式になっている。中央の天井を通

して、神殿に媽祖の聖像を三台並べて供えている。なぜ三台の媽祖聖像を並べているのかについて、以下の二つの要因が考えられる。

- ① 仏教の三尊仏から影響を受けて、法身、報身と化身を表す形而上学的存在を比喻するため。
- ② 祭りを行うたびに、媽祖の聖像を順番に神輿で担いで町中を巡遊させることがある。毎年一台ずつ交代で行って、少なくとも一台は廟に鎮守として残すこと。このような分身祭祀は、民間信仰に常に見られる現象である。

五、文学への影響

今回の実地調査を通して、媽祖信仰の民俗的な伝播及びその過程が文学における媽祖像の形成に与えた影響というものを再認識することとなった。

媽祖は、宋代に実在した官吏の娘が死んでから神となったものであるため、歴代の地方志には彼女の神異伝（『衢州府誌』、『衢県誌』、『大明一統志』などの地方志の天妃条にご参照まで）が記録されている。そして、媽祖の伝説に信憑性がある、更に貿易などを通して、全国にまで広がることで、次第に民俗文化として定着していった。

また、媽祖信仰の伝播には仏教、道教の様々な神格との習合が見られる。こうした神仏習合は、文学作品にも反映され、物語の素材となった。

例えば、明の呉還初が著した『天妃出身济世傳』における媽祖の人物像には、正に仏教、道教、儒教のいわゆる三教合一の特性が備えられる。また、媽祖の民間故事、伝説の伝播は、『夷堅志』のような文語文による志怪小説や「全宋词」の創作の題材となっている。

故に、文学における媽祖像は、文学の虚構が史実とあいまって、民俗文化や地域文化の影響を受けて形成され





●图6 天皇巷の入り口



●图7 天皇巷天妃宮

たものである。それと同時に、文学的な創作からも媽祖信仰の伝播にも影響したのである。

従って、媽祖信仰は単なる水神信仰というだけでなく、中国の経済、文化、政治と繋がっており、すでに文化の象徴の一つになっている。

【注】

- 1) 『上海資料研究』風土卷「天妃宮略考」、中華書局、民国25年版、1984年再版
- 2) 潘明權、柴志光『上海道教碑刻資料集』、復旦大学出版社、2014
- 3) 順濟聖妃廟：成化『杭州府誌』「在艮山門外。艮山有祠，

自商份感夢始。開禧、寶慶，一再創建，又有別祠在候潮門外蕭公橋。」丁伯桂『艮山順濟聖妃廟記』……（略，詳見「碑記卷」）。國朝康熙十九年封天妃為“護國庇民妙靈昭應弘仁普濟天妃”，遣禮部司官致祭。

天後宮在武林門內，城東北隅。國朝雍正九年總督臣李衛毀西洋天主堂改建。李衛「改天主堂為天後宮碑紀」……（略，詳見「碑記卷」）。雍正十一年八月禮部議覆福建總督郝玉麟條奏：各省城建天妃祠宇，一例春秋致祭，奉旨：“依議”

- 4) 3世紀、異民族の侵入に追われ南下し続けた客家の人々が、安住のために築き上げた要塞のような城壁に囲まれた建築物である。

从妈祖信仰的本容与变容来看其对文学的影响 ——以上海、杭州、衢州为中心

外国語学研究科 中国言語文化専攻 博士後期課程 王子成

一、研究主旨

媽祖是中国沿海地区，特别是以福建省为中心的东南沿海地区广为群众信仰的道教女神之一。随着我国商贸的发达，海上贸易的频繁，福建商人们通过商业活动，把媽祖信仰传播到了全国各地。而媽祖也从航海安全的守护神渐渐发展成为有求必应的万能神祇，并受到历朝历代皇室的供奉，因而祭祀媽祖的活动也升级成了国家的正式典礼。可见，媽祖信仰不仅是单纯的民俗信仰，而且还发展成为一种文化的信仰。这在对地域文化的认同以及传统文化的继承上，有着重要的社会意义和文化史意义。

与此同时，媽祖及其信仰也对文学产生了极大的影响，如宋朝以后的文人笔记、小说中，皆可看到源于媽祖传说

而演变过来的文学故事，即为明证。换言之，古典文学作品从媽祖信仰中汲取了很多的创意和素材。因此，笔者以为：从人类学这一新视角去研究古典小说，将能给古典小说研究带来勃勃生机。于是，笔者试图对此进行一点探讨，便在江浙地区围绕媽祖及其信仰进行了为期半个月实地考察。考察的重点在于：通过调查媽祖信仰，来找到更多民间风俗与文学作品产生、发展之间的关系。具体来说，是去探寻在古典小说中常见的江南地区水神故事与水稻文化之间存在着怎样的关联，并进一步去明确在文学作品中媽祖形象形成的过程。

现将考察情况简要报告如下：



二、上海、杭州、衢州的妈祖信仰

（一）上海的妈祖信仰

依据《上海资料研究》所收“天妃宫略考”¹⁾一文，可知上海曾存在三所天妃宫，分别是圣妃宫（也称为“顺济庙”）、南圣妃宫和天妃宫。其中，圣妃宫建立时代最早，也是上海现存唯一的一所妈祖庙。

关于圣妃宫的所在，明正德《松江府志》载：“南圣妃宫，在市舶司之左”；嘉靖《上海县志》载：“南圣妃宫，在顺济庙南，顺济庙又名圣妃宫，人呼此为南圣妃宫”。另在《上海道教碑刻资料集》所收录元朝至元二十七年宋渤的《上海顺济庙记碑》²⁾中，有“莆有神，故号顺济，松江郡之上海为祠，岁久且圯，宋咸淳中，三山陈珩提举华亭市舶，议徙新之……”之记载。因此，通过这些记载，我们可以考证出上海最早建立的妈祖庙，其成立最晚可追溯至宋朝淳熙年间。

由于妈祖的灵验，宋徽宗赐予妈祖“顺济夫人”之称号是在宣和五年（1123年）。“天妃宫略考”一文考证，上海顺济庙随着年深日久，圯坏后于淳熙七年（1271年）重建。从中我们可以得出妈祖信仰很早就传播到了上海，并广受信仰的推论。

这座妈祖庙，最初建立在上海小东门的十六铺。历代毁于战火并数次重修，现在我们能看到的建筑是清代建造的，被评为非物质文化遗产。为了更好地保护，上海市政府把妈祖庙整体移动到了松江方塔园中。也就是现在的“浦江妈祖”。

小东门十六铺地区，在宋朝时时渔民的聚落。随着贸易的繁荣，清朝时已经形成了很多贸易码头。妈祖信仰作为福建的乡土信仰，其在上海的传播归功于福建商人的贸易活动。此外，随着中国南部沿海的移民不断增多，妈祖信仰兴盛一时。

与此同时，为了探寻妈祖信仰在上海的传播，与上海本地的水神信仰有着怎样的关系，笔者调查了上海市内的乡土神庙以及水神庙。

上海城隍庙位于上海豫园，其中除了供奉着上海的城隍神，还供奉着道教的神祇。另笔者感兴趣的是，城隍庙管理者的道士们，把道教的慈航真人和妈祖作为同一神格而信仰、供奉，这里就体现出妈祖与上海本地土地神的一种融合了。此外，笔者还探访了位于市内昆明路73号提篮桥地区的下海庙。提篮桥地区曾是入海口，是水路运输和交通的要冲。在此处建立下海庙，供奉海运相关的守护神们。现今下海庙已经基本转变为一所佛教寺庙。而在寺庙侧殿中供奉了妈祖。是福建湄洲妈祖庙中妈祖的分灵祭祀。

（二）杭州的妈祖信仰

有关杭州的妈祖信仰。首先我们来看看相关文献的记载。南宋吴自牧在《梦粱录》中记载道：“顺济天妃庙，在艮山门外，又行祠在城南萧公桥侯潮门外瓶场河下市舶

司侧。……其妃之灵多于海洋之中，佑护创比，其功甚大，民治疾苦，悉赖帡幪”。由此得知，妈祖信仰最迟在南宋时代已经传播到了杭州。

清雍正《浙江通志》卷二百十七祠祀一·杭州府上“钱塘县、仁和县”条目中，有关于妈祖庙的记载³⁾。同时，在嘉靖时代的《使琉球记》中，有这样的记录。“后行经杭州，登吴山，致祭越国公祖庙，庙之左有天妃宫，天妃为海道正神。……越日，过孩儿巷天妃宫，无意中得《天妃经》一函于案上，其后详书历朝封号，则“碧霞元君”者，崇祯十三年加封天妃之号也，神之灵显如是。”，基于文献资料的记载，笔者去吴山、武林门、孩儿巷以及周边地区进行了调查。遗憾的是，随着时代的更替，妈祖庙早已无迹可寻了。但是，在吴山的调查中，笔者发现往昔香火鼎盛的妈祖信仰，现今已经悄然转变成了观音信仰。其中的理由，笔者推测随着交通的发达以及海运风险的降低，妈祖信仰作为水神信仰，已经渐渐脱离了群众基础，取而代之的就是“有求必应”的观音信仰了。从中也可以看出妈祖信仰和观音信仰的同化现象，首先她们作为女神在神格乃至形象上都很接近。其次，在信仰上，有关妈祖的传说故事与古典小说中的观音显灵的故事有很多相似之处。

因此，笔者认为吴山的观音信仰是妈祖信仰的一种变容而继续存在着。

（三）衢州的妈祖信仰

衢州，顾名思义，意味四通八达的道路，曾有“四省通衢”之美称。衢州作为交通要冲，往来商旅不绝，贸易活动曾经十分繁盛。

衢州南接福建南平，通过水路可通隋炀帝下令开凿的京杭大运河。因此，在妈祖信仰的传播中，很有可能是从福建出发通过衢州，传播到了上海以及杭州。因此，衢州是调查妈祖文化之变容最重要的场所之一。笔者围绕衢州在传播妈祖信仰中曾发挥的重大作用，展开了调查。

关于衢州的妈祖庙，民国郑永禧编《衢县志》载：“原有老天后宫又称天妃宫，在县治西朝京门之南，为明代军卫漕船吏卒所建。说明这座建筑最初是漕运船只上的军士们所建。清嘉庆年间，由旅衢的福建商人出资重建，同时作为福建商人的福建会馆。”。根据文献记载，我们可以知道，衢州的妈祖信仰与漕运有着重要的联系。由于其建立在明代，考虑到上海的妈祖庙建立在宋朝淳熙年间，所以笔者认为衢州应该曾有更早的妈祖庙。

此外，这座妈祖庙由福建会馆重建是在清朝嘉庆年间。据《衢州府志》“坊市”条记载，位于市内天王巷。笔者通过实际调查，确认此座妈祖庙实际是坐落于市区的天皇巷内。通过走访调查，发现在衢州方言中“王”与“黄”的发音相同，因此可以得知，随着时代的变迁，地名从最开始的天王巷逐渐被误称为天皇巷了。



天皇巷天妃宫的建筑与上海天妃宫（一般的佛寺、道观形式）完全不同，外观类似四合院形式，正门向西，院内如同客家围屋，通过中央天井后是正殿。殿内供奉三座妈祖圣像。究其原因，笔者认为主要有以下两点：

其一，受到佛教三尊佛的影响，为表法之存在。其意义分别代表法身、报身、化身。

其二，在每年的祭祀活动中，村民都会用神轿抬出一尊妈祖在村中巡游。每年交换一尊，确保至少一尊神像镇守在庙中。

如上所述，妈祖这样的分身祭祀，是在民间信仰中颇为常见。

三、妈祖信仰对文学的传播

通过此次实地调查，对妈祖信仰发展成为民俗信仰，以及妈祖及其信仰在其传播过程对文学中妈祖神格形象的形成所产生的影响，笔者有了新的认识。

妈祖是宋朝官吏的女儿，从史实人物到死后封神，历代地方志中都有关于其神异方面的记载（参考《衢州府志》、《衢县志》、《大明一统志》等）。妈祖因其灵异而广受信仰，更通过商贸活动而传播到全国，在此过程中，逐渐作为一种民俗文化而确定下来。

与此同时，在妈祖信仰传播的过程中，和其他的民俗信仰、宗教信仰之间产生了交叉、融合，特别是在神格上吸收了佛教、道教的神格形象，愈趋完善。这种融合也体现在了文学作品中，成为了故事的素材之一。

比如，明朝吴还初著《天妃出身济世传》中的妈祖的人物形象，就具备了佛道儒三教合一的特性。此外，妈祖的民间传说，在文言小说《夷坚志》乃至诗歌集《全宋词》的创作上，都成了重要的题材之一。因此，文学作品中的妈祖形象，是在虚构与史实之间，并结合民俗文化的影响而逐步形成的。同时，文学化的妈祖故事，又反过来对妈祖信仰的传播发挥着积极的促进作用。

综上所述，妈祖信仰不仅仅是单纯的水神信仰，由于它与中国的经济、文化、政治等方面有着千丝万缕的关联，已经俨然形成了一种文化的符号，深深融入了中国传统文化海洋之中。

[注]

- 1) 《上海资料研究》风土卷“天妃宫略考”、中华书局民国25年版、1984年再版
- 2) 潘明权、柴志光《上海道教碑刻资料集》、复旦大学出版社、2014
- 3) 顺济圣妃庙：成化《杭州府志》：在艮山门外。艮山有祠自商份感梦始。开禧、宝庆一再创建。又有别祠在候潮门外萧公桥。丁伯桂《艮山顺济圣妃庙记》……（略，详见《碑记卷》）。国朝康熙十九年封天妃为“护国庇民妙灵昭应弘仁普济天妃”，遣礼部司官致祭。
天后宫：在武林门内，城东北隅。国朝雍正九年总督臣李卫毁西洋天主堂改建。李卫《改天主堂为天后宫碑纪》……（略，详见《碑记卷》）。雍正十一年八月礼部议覆福建总督郝玉麟条奏：各省城建天妃祠宇，一例春秋致祭，奉旨：“依议”

